

# 第1 小学校における不登校への予防的な対応の在り方

## —不登校のサインの早期発見・早期対応のために—

相談研修課 長期研修員 仲田 芳弘

### 1 研究の目的

『不登校に関する実態調査—平成5年度不登校生徒追跡調査報告書—』によれば、中学校で急増する不登校生徒の多くは、小学校の段階で何らかの問題を抱えていると報告されている（注1）。これは、小学校段階において、登校していても不登校の準備状態が形成されつつある子供が多いことと、そのような子供に対する予防的な支援が重要であることを指摘したものと受け止められる。

私自身、登校渋りの子供への対応が十分にできなかった経験がある。今年度、教育相談部でのカウンセリングや不登校についての研修を通して、登校渋りをするまでのその子供の言動には小さな変化があったことに改めて気付かされた。

小学校の段階では、自分の感情や欲求を適切に言語化して表現することが難しいため、不登校につながる不安や悩みは小さな言動の変化や身体症状で表されること（以下このことを「不登校のサイン」とする）が多い。そのため、教師は子供からの不登校のサインを見い出すことが遅れ、適切な対応に結び付かないこともあると思われる。

以上のことから、不登校への予防的な対応の一つとして、教師が不登校のサインを早期に察知し、適切に対応することについて研究を進めることとした。

### 2 研究仮説

教育相談の考え方や方法を生かした日常の子供とのかかわり方に関する学習会（以下「教育相談研修会」）を行うことによって、教師が、児童生徒理解を深め、子供へのかかわりの変化・向上を図れば、不登校のサインを早期に察知し、適切に対応することに結び付く。

### 3 研究の方法

#### (1) 不登校の早期発見・早期対応のための教育相談研修会の計画と実施

#### (2) 研修会での学習が生かされた教育実践の調査と分析

本研究は、所属校の協力を得て進めた。所属校であるS小学校は、全校児童120人余り、教職員15人の小規模校で、県中部H町の山間部に位置した農業が盛んな地域にある。子供たちは落ち着いた学校生活を送っており、学習や行事等への取組は熱心であるが、全学年単学級で6年間同一集団であるため、人間関係が固定化しやすい面もある。今年度の重点目標には「心をかたむけて みよう きこう つたえよう」を掲げ、他者とのかかわりを重視した教育活動を進めている。

【資料1】研究の計画

月	実施内容
8	第1回教育相談研修会 ・教師の自己理解を深める ・「聴く」ということ
9	教育実践の振り返り 第2回教育相談研修会 ・子供の言動の背景を考える
10	教育実践の振り返り 第3回教育相談研修会 ・不登校に関する理解を深める
11	教育実践の振り返り 第4回教育相談研修会 ・肯定的な見方・かかわり方
12	教育実践の振り返り 研修会後の感想と教育実践の振り返りによる分析・考察

## 4 研究の内容

### (1) 教育相談研修会の計画

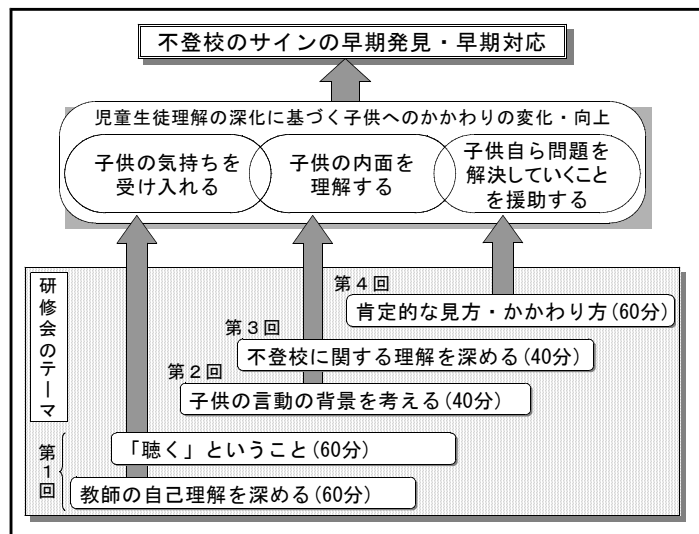
教育相談研修会は、資料2に示す研修構想図を基に実施を計画した。

研修は、所属校の校内生徒指導研修会の中で実施し、すべての教師が参加することとした。実施時期は、所属校の教育課程を考慮するとともに、子供の学校生活での多様な表れが見られる2学期に設定し、回数は4回とした。研修会の時間は、放課後に実施することを想定し、1時間以内とした。

不登校のサインの早期発見・早期対応には、教師が児童生徒理解を深め、子供へのかかわりの質的な変化・向上を図ることが重要である。本研究では、そのために必要な教師が身に付けるべき資質を、「子供の気持ちを受け入れる」「子供の内面を理解する」「子供自ら問題を解決していくことを援助する」とし、これらを段階的に研修することとした。実際の研修にあたっては、これら三つの資質それぞれとの関連が図られるよう、さらに五つの研修テーマを設定した。また、各テーマの研修方法は、実習や演習を中心に構成した。

資料3は、五つの研修テーマとその設定理由である。

【資料2】研修の構想



【資料3】研修テーマ設定理由

身に付けたい資質	研修テーマ	テーマ設定理由
子供の気持ちを受け入れる	教師の自己理解を深める	子供の気持ちを受け入れるためには、まず教師が自分自身の子供の見方やかかわり方を客観的に理解することが必要である。そして、その上で子供の話を丁寧に聴くことが重要である。
	「聴く」ということ	
子供の内面を理解する	子供の言動の背景を考える	子供の内面を理解するためには、教師が子供の言動の背景にある要因を多面的に推し測る必要がある。
	不登校に関する理解を深める	不登校についての基礎的な知識が教師にあれば、不登校のサインを察知し、その内面を理解することに役立つ。
子供自ら問題を解決していくことを援助する	肯定的な見方・かかわり方	子供自ら問題を解決していくことを援助するためには、第1回から第3回までの学習を実際の子供とのかかわりに生かすとともに、よさや可能性に着目して子供の肯定感を高める教師の姿勢が必要である。

## (2) 教育相談研修会の実施

### ア 第1回教育相談研修会

#### (7) 教師の自己理解を深める

教師は子供とのかかわりの中で感情的になったり、偏った子供の見方をしたりすることがある。子供の気持ちを受け入れ、子供の理解を深めるためには、教師自身が抱きやすい感情や子供に対する見方の傾向等を客観的に把握することが必要である。

そのために、エゴグラム（注2）による自己理解を深める演習を実施した（資料4）。チェックリストの結果を分析する際、子供とのかかわりの具体的な場面を想起しながら行うことを配慮事項として示した。

この演習を通して、自分を振り返り理解することは子供とかかわる上で大切だという感想が、参加した教師全員から得られた。その理由として、「教師も人間であり、感情の起伏やストレス等があるのが当然だが、それをコントロールして、常に子供の心に寄り添った対応が必要だと思う。」「自分を客観的に振り返ることが、子供と自然に接することにつながる。」などが挙げられた。また、「これまで客観的に自分を振り返ることはなかった。今後も機会をつくりやってみたい。」という自己を振り返ることの必要性や、「自分にも多面性があることがはっきり分かったので、子供も多面性があるのは当然だということ考えた。」という子供の見方の広がりに関する気付きを指摘する感想もあった。

【資料4】自己理解を深める演習の様子



#### (イ) 「聴く」ということ

教師は子供との会話の中で、指導的側面が中心となってしまう、子供の気持ちを受け入れながら聴くことができないことも多い。教師自身が気持ちを受容することの意義を体験的に知り、その上で子供の気持ちを受け入れる聴き方を日常の子供とのかかわりに生かす必要がある。

そこで、役割演技による二つの実習を二人一組となって行うこととした。

初めの実習は、シナリオを基にして、否定されたときの気持ちと受け入れられたときの気持ちの相違を体験する役割演技を実施した（資料5）。

【資料5】否定されたときと受け入れられたときの気持ちを体験する実習

<p>否定されたときの気持ちを体験する あえて、子供の気持ちを否定してください。 体育の水泳の時間、何度言っても、水泳着を忘れてくる女の子が、体育があるという日の前日に、小さな声で担任に言いました。 子供「先生、私、水泳好きじゃない。」 先生「(その気持ちを否定して)」</p> <p>-----</p> <p>受け入れられたときの気持ちを体験する Aさんの気持ちになると… Aさんは、上司に頼まれた仕事をついすっかり忘れてしまい、上司から厳しく注意を受けました。 その後、Aさんは、同僚に気持ちを話します。 Aさん「上司が部屋の中で大声で怒鳴るんだよ。もう、頭にきたよ。(後略)」 同僚B「そんなに腹を立てるなよ。そんなふうにする方がおかしいよ。(後略)」 同僚C「上司もたぶん上からのプレッシャーがあるんだろう。気にするなよ。(後略)」 同僚D「ああ、それはつらかったね。みんなの前で叱られるなんて。(後略)」</p>
---

注) 以下の資料を参考に筆者が作成  
出典) アデル・フェイバ、エレイン・マズリッシュ共著、三津乃・リーディ、中野早苗共訳『子どもが聴いてくれる話し方と子どもが話してくれる聴き方』、きこ書房、1995、17～18ページ、21～24ページ

次の実習は、二人が話し手と聞き手に分かれ、聞き手は、「相手の話を顔を背けたままの状態での聞き方」と、「相手の目を見たりうなずいたりなどの非言語のコミュニケーションを意識した聴き方」の、異なる二つの態度を意識して対応し、それぞれの態度によって話し手が抱く感情の相違を体験する役割演技を行った。

二つの実習を通して、聴くことについての認識が深まったという感想が全員の教師から得られた。その中には、「自分という存在そのものを否定されたような気持ちになったが、受け入れられれば分かってもらえたと思い、怒りが和らいだ。」「受け入れることは、大人でも子供でも同じで大切なこと。」という相手の気持ちを受容することの大切さや、「聴いていることを態度で表さないと、相手は話してくれないことが分かった。」という聴く態度が話す相手に与える印象の大きさについての感想があった。また、「今まで気持ち半分で聴いていたことを反省しました。」と自分自身を振り返った記述や、「受容的な態度は意識していないとできないと思った。」という受け入れることの難しさについての感想もあった。

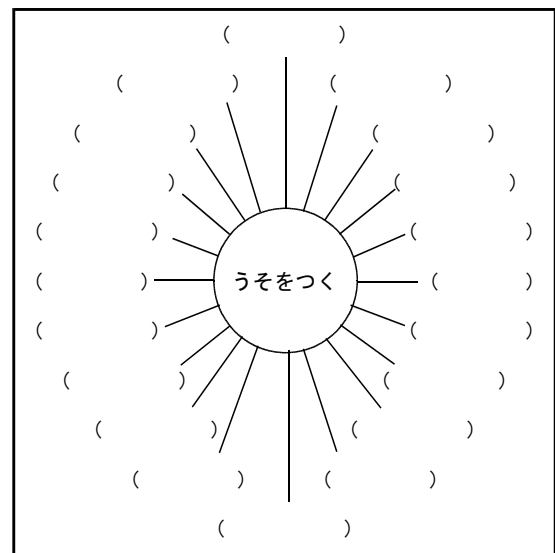
## イ 第2回教育相談研修会〔子供の言動の背景を考える〕

教師は、子供の言動を、その表面に表れた現象のみをとらえて判断したり、自分の経験の枠だけに頼った理解をしてしまったりすることがある。子供の言動を理解するためには、その背景にある感情や欲求を深く考えることが大切である。

そこで、「うそをつく」という行為の背景にあると考えられる理由を出し合う演習（資料6）を実施した。参加した教師からは、20以上の意見が出され、「このうち、半分以上は自分の頭にはなかった。」と述べた教師が多くいた。

研修会後の感想には、参加した9人中7人が、「自分の今までの経験だけに頼って、子供を決めつけていた。」「固定化された価値観の中だけで判断していた自分に改めて気付くことができた。」など、自分を振り返り、その上で、安易に子供の内面を断定せずに、子供の「うそをつくる理由」について考えることが子供への適切な援助に結び付くことを理解できたという記述をしていた。さらに、「本当は『悲しませたくない』ためについた子供のうそを、教師が『人を困らせたい』からと安易に判断し、指導してしまうことはよくないと改めて感じた。」と、「うそをつく」理由として出された意見の中にある質的な相違点に言及した感想もあった。

【資料6】子供の言動の背景を多面的に考える演習



出典) 日精研心理臨床センター編『実践カウンセリング・ワークブック』, 金子書房, 1992, 10~15ページ

また、小学校では教師同士で一人の子供のことについて話し合う機会が多くないこ

とから、「教師によっては子供の見方に相違があり、子供の理解を深めていくために他の教師の意見にも耳を傾けることの必要性を感じた。」と子供の理解に関する教師間の連携の必要性について指摘した教師も5人いた。

### ウ 第3回教育相談研修会〔不登校に関する理解を深める〕

小学校においては、教師が不登校児童にかかわる機会が多いとはいえない。そこで、不登校に関する基礎的な知識を中心に理解を深める時間を設けた。また、不登校に関する知識をもっている、教師が子供の表れを不登校の兆候として認識しなければ、単なる体調不良や一過性の言動、本人のわがまま等として見過ごしてしまい、適切に援助することができないこともあり得る。不登校に結び付く可能性を考慮に入れて子供の言動をとらえ、理解を深める必要があると考えた。

研修会では、まず資料7に示した文献を基に不登校についての理解を図った。

次に、小グループに分かれて、学級内で配慮を要する子供の理解と援助の在り方を話し合う演習（資料8）と、不登校についての視点をもって子供の言動をとらえる紙上での演習（資料9）を実施した。

この研修会後、「気になるから、かかわるのではなく、どの子供にも常にかかわる必要があり、小さな変化に敏感に反応できる目をもたなければいけない。」

「生活態度がしっかりしているから大丈夫と思っていた子供や、目立たない子供も気に掛けるようにしたい。」など、日常の子供とのかかわりの重要性についての感想が、参加した教師9人中8人から出された。また、中学年担当の教師は、「普段から忘れ物が多く授業に集中できない子供のために、放課後一緒に過ごす時間をつくって学習指導をしたい。」と、子供の成長に配慮した長期的な視点から、高学年や中学校で不登校にならないように、今できる対応を考えた記述をし

#### 【資料7】不登校の理解を深めるために使用した文献

- ・ 現代教育研究会『不登校に関する実態調査—平成5年度不登校生徒追跡調査—』
- ・ 文部科学省報告『今後の不登校への対応の在り方について』
- ・ 森田洋司編著『不登校—その後』
- ・ 文部省『小学校生徒指導資料 小学校における教育相談の進め方』

#### 【資料8】配慮を要する子供の理解と援助のための演習

小学3年生A子。最近クラスの中で気になることが多い。表情が乏しくなり、「～がにらんだ」「足が痛い・お腹が痛い」「家に帰りたい」などと担任によく訴えに来る。体育の時間は体の不調を訴えて見学することが多い。休み時間も遊びの仲間に加わりたくせず、ひとりでぼーっとしている。専科の教師が担当する音楽や図工の時間に保健室に行くこともよくあるという。最近では月曜日の欠席が増えてきた。このまま不登校状態になるのではないかと心配である。

こんな状態の子供がクラスにいたら、あなたはどのようなアプローチをしますか。(1) A子の問題をさらに理解するために、(2) とりあえずA子の“危機”を救うために、の二つに分けて考えてみてください。

出典) 菅野純著『教師のためのカウンセリングワークブック』, 金子書房, 2001, 137ページ

#### 【資料9】不登校についての視点をもって子供の言動をとらえる演習

「不登校のサイン」かもしれないという視点で、以下の言動をとらえると、担任としてどのような対応をとるでしょうか。

- ・ 3日以上欠席の子供
- ・ 宿題を忘れることが多くなった子供
- ・ 教師に依存することが多くなった子供
- ・ 身の回りの整頓ができない子供

注) 筆者作成

ていた。

しかしながら、「子供からのサインを見逃さないよう、子供の変化を注意深くとらえなければならぬが、その変化をサインと認識するか否かの判断が難しい。」という感想があったように、不登校のサインの見極めに難しさを感じている教師も多い。

## エ 第4回教育相談研修会〔肯定的な見方・かかわり方〕

教師の否定的な見方が子供に対する何気ない言葉の中に表れ、子供が教師を信頼できなかつたり、自分に自信がもてなかつたりする感情を抱かせてしまう場合がある。

子供が自分自身のよさや可能性に対する自覚を高め、自ら問題に向き合うようにするためには、教師が子供のあるがままを肯定的に見ようとする姿勢でかかわることが必要である。

まず、資料10に示すように、子供に対して否定的な見方をしてかかわるというシナリオを用意し、そのときの子供の感情を体験する役割演技の実習を行った。

次に、資料11の場面を提示し、日常的に問題点を指摘されてきている子供に対し、その子供が自分自身に否定的な感情を抱かず教師への信頼感を高められるように、子供のよさや可能性に着目した肯定的なかかわりをする役割演技を実施した。

最後に、肯定的な見方・かかわり方の根底には、子供は自らよくなるとうとする存在であるという認識に立って、一人一人の子供の存在そのものを受け入れ、尊重する教師の姿勢が必要であることを、事例(資料12)を基に説明し、研修会のまとめとした。

### 【資料10】教師の否定的な見方による子供の気持ちを考える実習

あなたが子供なら何を感じますか？  
ホッチキスを借りに来た子供に。  
子供：先生、ホッチキス貸してください。  
教師：(手渡ししながら)ちゃんと返してよ。  
子供：・・・

注) 筆者作成

### 【資料11】肯定的な見方・かかわり方の実習

5年男子。いつも落ち着きがなく、授業中手悪さをしていることが多く、ほとんど聞いていない。身の回りの整理整頓がうまくできない。教科書やノート、体育着などの忘れ物をすることが多い。(中略)

先生：(国語の時間)じゃ、これから宿題の発表をします。  
子供：先生、ノートを忘れたので発表できません。  
先生：どうして忘れたの？  
子供：4年生のときに使っていたノートを間違えて持ってきてしまいました。

出典) 吉本武史著『教師だからできる5分間カウンセリング』, 学陽書房, 2000, 154ページ

### 【資料12】肯定的な見方・かかわり方の事例

#### ある母親からの連絡

小学校中学年の娘が、毎朝登校渋りをしています。登校時間になると、「お腹が痛い。」と言って、家を出る時刻になっても、トイレから出てこないことも何度かあります。たぶんマラソンの練習が苦になっているのだと思います。でも、その子が、何を支えに登校しているかという、担任の先生の「私はあなたのことが大好きだよ。」という言葉です。それ以前は、「先生は怖い。」「厳しい。」などと言って、あまり学校での様子や担任の先生のことを話しませんでした。それが、今では「先生がね…」という言葉が多く聞かれるようになり、「先生の誕生日に手紙を書いてもいいかな。」と言うようになりました。自分のことを好きだと言ってくれる担任の先生がいてくれるから、お腹が痛くても、「学校で痛くなったら、先生に言うから。」と言って、娘は何とか登校しています。

「あなたのことが大好きだよ。」というメッセージには、「何かができる、できない」は関係なく、「あなたらしさがいいんだよ。」というメッセージが込められていると感じました。

注) 筆者の経験を基に作成

研修会后、参加した教師7人中5人が、「普段意識していなかったことだったが、役割演技をしてみて改めて日々の子供とのかかわりを考えた。」「教師の何気ない言葉や態度が子供に大きく影響するものであることが分かった。」「どんなにささいなかかわりであっても、子供に肯定的に接し、その中で子供の小さな変化を敏感に感じ取っていきたい。」など、教師の肯定的な見方やかかわり方の重要性について記述していた。さらに、「確かに、肯定的なかかわりによって、子供が安心して生活できると感じる。しかし、その子供をあるがままに受け入れる気構えがないとできることではない。」という、第1回の研修会のテーマとの関係に言及しながら改めてその難しさを指摘する感想も2人からあった。

### **(3) 教育相談研修会での学習が活かされた教育実践の分析**

研修会に参加した教師に、各研修会の1か月後に学習の成果が活かされたと思われる教育実践を記述してもらい、それを基に、児童生徒理解がどのように深まり、子供へのかかわりがどのように変化したかについて分析を行った。

#### **ア 子供の話に耳を傾けることの重要性を痛感したE教諭**

##### **(7) 研修会前のA男とのかかわり**

低学年のA男は、友達とのけんかや自分の行動に関して自らを正当化する発言が多くなり、身体の痛みを訴えて保健室へ行く回数も増えていた。担任のE教諭は、A男の自分を正当化する発言を認めてはいけないという考えが先に立ち、A男に対して注意することが多くなっていた。

##### **(4) A男の話を聴くことを心掛けたE教諭**

E教諭は、第1回研修会后に「もっと子供の話に耳を傾けて聴かなければいけないと痛感した。」という感想を書いていた。そして、2か月後、教育実践の振り返りには、「子供のことを冷静な目で見られるようになった。子供が自分のことを正当化しようと訴えてきても、反論したり注意したりするのではなく、受容的な聴き方ができるようになってきた。」と記述している。

第1回の研修会以降、E教諭は、A男の自分を正当化した発言に対しても、感情的にならずに、まず聴くことを心掛けてA男に対応した。また、A男の家庭環境を再度調査したり日ごろのA男の言動を改めて整理したりするなど、その背景にある感情や欲求について考えるよう努めた。このようなことを通して、E教諭は、A男が話を聴いてくれる人の少なさに不安を感じているのではないかと推察するに至った。そこで、E教諭は昼休みや放課後にA男と一緒にいる機会を意図的につくった。

このようなE教諭のA男へのかかわりを通して、A男は登校後真っ先にE教諭に近付き、積極的に話をするようになり、表情や行動にも落ち着きが見られるようになった。

##### **(4) E教諭の実践から**

E教諭は、全4回の研修会終了後、「自分自身を振り返るよい機会となった。特に『聴く』』ということの研修以後、今までより、子供に対して優しくなれた感じが

する。」と述べ、A男との信頼関係を深められたことを実感している。

第1回の研修会は「聴く」というカウンセリングの基本の実習であったが、エゴグラムを用いて自分の行動の特質を理解した上で行った実習であったために、より客観的に自分の「聴く」姿勢を再認識する機会となったと思われる。

小学校低学年の子供には、分離不安を背景とする不安定な言動が見られることがあるが、E教諭の実践のように、教師自身が抱きやすい感情や子供に対する見方の傾向を見直し、子供のささいな話であっても「聴く」ことによって、子供の心理的な安定に結び付いていくと考えられる。

## イ 子供の言動の背景を考える大切さを実感したF教諭

### (7) 研修会前のB男とのかかわり

中学年のB男は、周囲の人に対して乱暴な言葉遣いをしがちである。F教諭は、このような言動をするB男が気になっていたが、自分が所属する学年の子供ではないことから、かかわる機会が多いとはいえなかった。

### (4) 子供の理解を深め積極的にかかわったF教諭

F教諭は第1回と第2回の研修会を経験し、「もっと子供の話を真剣に聴かなければいけない。」「子供の言動に対して先入観をもった見方をしないで、子供の背景にあるものを考えるようにしたい。」と感想を記述した。

B男と接する場面では、その言動について注意する前に、まず話を聴くことを心掛けたり、第2回の研修会の演習で取り上げた「うそをつく」を「乱暴な言葉遣いをする」に置き換えて考えたりして、その背景を理解するよう努めた。このようなことを通して、自分のことを認めてほしいという思いがB男の乱暴な言葉遣いの背景にあるのではないかと推察した。

そこで、廊下や階段等でB男に出会ったときには、F教諭から声を掛け、そのときの気持ちを受け入れながら会話をし、B男のよさを認めるよう積極的にかかわった。

このようなF教諭のかかわりによって、B男は自分からF教諭に話し掛けるようになってきた。F教諭は「それまではかかわりが薄かったのが、少しずつ、つながりがもて、私の名前を呼んでくれるようになった。」とB男の変化を語っていた。

### (5) F教諭の実践から

第2回の研修会で実施した演習は子供の理解を深めるための演習であったが、第1回の研修会で自己理解を深めたことが生かされ、教師が自らの子供の見方を省みる機会ともなった。そのことが、子供の話をよく聴くことや、子供の言動の背景を多面的に考える必要性を感じることに繋がったと思われる。

小学校の中学年は大変行動的であり、「自分で何でもしたい。」「自分のしたことを認めてほしい。」などの気持ちを強くもっている。しかし、その気持ちが周囲の者への乱暴な言葉遣いによってのみ表現されるとしたら、ほかの友達から孤立してしまい、学校での自分の存在感をもてなくなることも考えられる。



このような子供に対して、F教諭が実践したように、注意すべきことは注意しながらも、その言動の背景をより深く推察して積極的にかかわることによって、子供は、教師が自分に關心を示してくれると感じて、自ら教師にかかわりをもつようになる。このような教師と子供との相互交流の中で、両者の間に信頼関係が築かれ、子供の理解を一層深めることもできる。

## ウ 一方的な指導になりがちなことに気付いたG教諭

### (7) 研修会前のC子とのかかわり

高学年のC子は日ごろ活発で明るい表情が多かったことから、担任のG教諭は、学級内において特に配慮を要する子供として意図的にかかわることはなかった。

### (イ) C子の小さな変化を見逃さなかったG教諭

G教諭は、第2回と第3回の研修会后、「偏った見方をしないで、子供をより幅広くとらえる重要性を再認識した。」「子供の言動に敏感になり、その言動に何らかの理由があると考えて子供にかかわることが大切だ。」という感想を記述していた。

G教諭は、C子が休み時間に不安そうな表情をして一人で廊下を歩いていたことに気付き、心配になった。その後「どうかしたの。」「いつでも相談においで。」などの言葉掛けを意識的に行うようにした。

数日後、G教諭は、職員室の窓の外側に立っているC子の姿に、普段とは違う雰囲気を感じ、何か話をしたい気持ちがあるのではないかと察し、職員室の外にいたC子に声を掛けて話を聴いた。

### (ウ) 気持ちを受け入れ、共に考えようとしたG教諭

G教諭は、第4回研修会後の感想に「この研修中に、立ち止まって自分自身を振り返ると、頭では分かっているけど、実際には教師からの一方的な指導になりやすいことに気付いた。」と記述していた。

この気付きから、G教諭は、C子との相談の際、一方的に解決のための指示を与えるのではなく、気持ちを受け入れながら一緒に考えようとした。

このかかわりによって、C子は、友達関係がうまくいっていないという表面的なことだけでなく、自分のつらい気持ちも素直に伝えることができた。

### (エ) G教諭の実践から

第2回と第3回の研修会は、子供の内面を理解することを目的として実施したため、参加した教師がそれぞれの研修会の内容を関連付けてとらえることができ、子供の言動の小さな変化の中に、子供にとっての意味があることを再認識する機会となった。さらに、第4回の研修会は、第1回から第3回までの研修会の内容を踏まえ、実践的な役割演技を実施した。それによって、肯定的なかかわりが、子供の問題解決への主体的な努力を促すことの認識を深めることができたと思われる。

思春期に差し掛かる高学年の子供の出す不登校のサインは、不安定な心理状態から微妙な変化として示されることが多いのではないだろうか。G教諭が実践したよ

うに、日常の温かいかかわりを通して、その微妙な変化に敏感になることが求められる。また、教師が子供の気持ちを受け入れながら、子供の自ら成長しようとする力を信頼して肯定的にかかわり、共に考えようとすることによって、子供は自分の内面を探り、整理して、主体的に問題を解決しようとする努力を始めることができると考えられる。

## **エ 教師間で協力して子供の理解を深める必要性を感じたH教諭とI教諭**

### **(7) 研修会前のD子とのかかわり**

高学年のD子は、最近休み時間や昼休み等に行動を共にしていた友達と距離を置き、一人で過ごすことが多くなっていた。担任のH教諭は、その行動の変化に気付いていたが、どのようにかかわり援助していけばいいか躊躇していた。

### **(4) H教諭とI教諭の積極的な情報の交換と共有**

第2回の研修会后、H教諭は「人によって見方やかかわり方がいろいろあることが再認識できた。」と、またH教諭の学級にT Tで入っているI教諭は「自分一人では子供の見方は狭いので、子供のとらえ方はもちろん、その子への対応の在り方等、何でも話し合うことが大切だ。」という感想をそれぞれ記述していた。

この研修会后、H教諭はI教諭に、D子のことについて相談し、協力を依頼した。I教諭は、その依頼に快く応じ、D子に積極的にかかわるようにした。そして、両教諭の間でD子についての情報の交換と共有が行われ、H教諭がそれまで気付かなかったD子の一面を認識することとなった。

H教諭は、その情報を基に、学級全体へ友達の気持ちを考えて行動することを伝えるとともに、D子へ「あなたのことを見守っている。」という言葉掛けを積極的に行うようにした。

その後、D子は自ら問題に向き合い、新たな友達関係をつくり、学校行事にも意欲的に取り組むことができた。

### **(5) 教師間の連携のために**

第2回研修会で実施した子供の言動の背景を考える演習は、参加した教師が、子供を深く理解するためには複数の教師が協力する必要性を再認識する機会となった。

H教諭とI教諭のように、積極的に子供についての情報交換をすることが、子供の理解を深め、かかわりを多様にして適切な援助を行うことに結び付く。また、多くの教師が子供とかかわることによって、小さな変化でも察知し、担任に情報を提供することもできる。このような教師間の連携による理解と援助によって、子供は学校において存在感や安心感をもつことができ、教師への信頼を厚くすることになると思われる。

教師間の連携が機能するためには、縦割り遊びや縦割り遠足等の交流活動を実施したり、担任以外の授業を意図的、計画的に設定したりするなど、多くの教師が他学年、他学級の子供とかかわる機会を設ける必要がある。また、校内で「子供を語

る会（仮称）」を定期的実施し、問題が顕在化している子供だけでなく、広く子供についての情報交換を行うことも効果的である。

これらの取組を通して、教師が他学年や他学級の一人一人の子供を身近に感じられるようになり、教師同士が、自分が接した子供の話について互いに話し合う姿が増えてくるのではないだろうか。その姿が基盤となり、校内に協働的な雰囲気も生まれてくると考えられる。

#### **(4) 不登校の早期発見・早期対応のための教育相談研修会の考察**

以上の教育実践の分析を踏まえて、研修会についての考察を行った。

##### **ア 実施時期について**

研修会の学習をより効果的に教育実践に生かすためには、学校への不応適が生じやすい4月から6月、または、9月から10月に実施することが望ましいと考えられる。また、夏季休業中において集中的に実施することも可能ではあるが、本研究のように学期途中で断続的に実施する方が、教師が子供との関係を現実感をもってとらえ、研修の成果を、直接的かつ実践的に、子供とのかかわりに生かすことができるという点で有効であるといえる。

##### **イ 研修の方法について**

各研修会の感想から、参加した教師が子供とのかかわりを実践的に学習することができたことが分かる。本研究において、4回の研修会を実習や演習を中心に実施したことが効果的だったと考えられる。

また、本研究の研修会では、一般的な事例を基に実習や演習を実施したが、実際の具体的な事例を取り上げることによって、子供の理解が一層深まり、教師のかかわり方をより実践的に考えることが可能になると思われる。さらに、個々の子供に対応するための事例研究を年間計画に位置付けることも必要である。

##### **ウ 研修テーマ及び内容について**

教育実践の分析からは、五つの研修テーマのうち、特に「『聴く』ということ」や「子供の言動の背景を考える」「肯定的な見方・かかわり方」の三つの研修内容が、教師の子供の見方やかかわり方に大きく影響していることが分かった。これらの研修を校内の研修会の中で意図的にかつ適切な時期に実施することが必要である。

教育実践の分析に表れている教師の子供へのかかわりの変化や向上の要因の一つとして、各回の研修会において、参加した教師がまず自分自身の子供の見方やかかわり方を省みていることが挙げられる。「教師の自己理解を深める」研修を第1回の研修会に設定したことによって、自分自身を振り返ることの重要性を教師が意識化することができたという点で有効であったといえる。

また、教師が自分自身の気持ちを率直に伝えることによって、子供は教師を信頼し、安心して自分の気持ちを話すようになる。「教師の自己理解を深める」研修を踏まえ、教師が子供に対して心を開いてかかわることを目的とした研修を実施することも必要であるといえる。

研修会後の感想に、「父性的なかかわりと母性的なかかわりを、どのようにバランスよく使い分けるかが課題である。」という指摘があった。研修会を進める上で、受容・共感的な理解、態度が、子供の行為に対して正すべきことまで許容してしまうようなかかわり方として誤解されないよう配慮する必要がある。

研修会で目指した教師の子供とのかかわりの変化や向上は、その後の教育実践の中で、子供の心理的な安定を図り、子供との信頼関係をつくるとともに、子供と一緒に考えようとする教師の姿勢として表れている。この教師の姿勢は、不登校状態にある子供への援助においても基本的な姿勢であると考えられる。したがって、現在不登校児童がいる学校においても、このような研修会は効果的であるといえる。

## 5 研究のまとめ

- ・ 近年、不登校への予防的な対応としては、学級集団等を対象として「人間関係づくり」や「社会性の向上」などを目指した様々な取組がなされてきているが、本研究では、それらの取組の基盤となる教師と子供とのよりよい人間関係づくりに着目し、子供に対する教師の個別的で直接的な対応の向上を目指した。教師が、一人一人の子供をかけがえのない存在として大切に思い、人間味のある温かいかわりをすることによって、子供との心の通い合う関係がつけられ、不登校のサインの早期発見・早期対応に結び付いていくといえる。
- ・ 所属校は「心をかたむけて みよう きこう つたえよう」という重点目標を掲げているが、これは子供だけでなく、教師にとっても目標とするものであり、本研究の研修会を通して目指した姿でもある。研修会後に「人の心は理解できるものではない。だからこそ、分かろうと努力し続けることが大切だと感じた。」という感想があった。このような教師の謙虚な姿勢が、子供の自己実現への努力を支えることになるのではないだろうか。
- ・ 不登校のサインの見極めに難しさを感じている教師も多いことから、今後も教育相談研修会を実施し、児童生徒理解に関する内容を充実させていく必要がある。
- ・ 不登校への予防的な対応につながる校内教育相談体制の在り方について、担任を核とした教師間の積極的な連携という視点から、更に研究を深めていきたいと考えている。

---

### 注

- 1) 現代教育研究会『不登校に関する実態調査—平成5年度不登校生徒追跡調査報告書—』, 2001年, 207～209ページ
- 2) エゴグラムとは、五つの自我状態（保護的な親の心・批判的な親の心・大人の心・自由な子供の心・従順な子供の心）が自分の心にどのくらいの割合で存在しているか、そのバランスをチェックリストによって把握し、その結果を折れ線グラフで表したものである。本研究では、「エゴグラム・チェック・リスト（成人用）」杉田峰康著『教育カウンセリングと交流分析』, チーム医療, 1988年, 212～213ページを使用した。